

「ケサランパサランを作る(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

「ケサランパサラン」は一時期、大流行した「謎の生物」である。餌を食べる浮遊動物だとか、ガガイモの種子の綿毛(下写真)だとか、猛禽類のペリットだとか、さまざまな説が飛び交ったが、結局正体がわからない。「ケセランパサラン」とも呼ばれる。



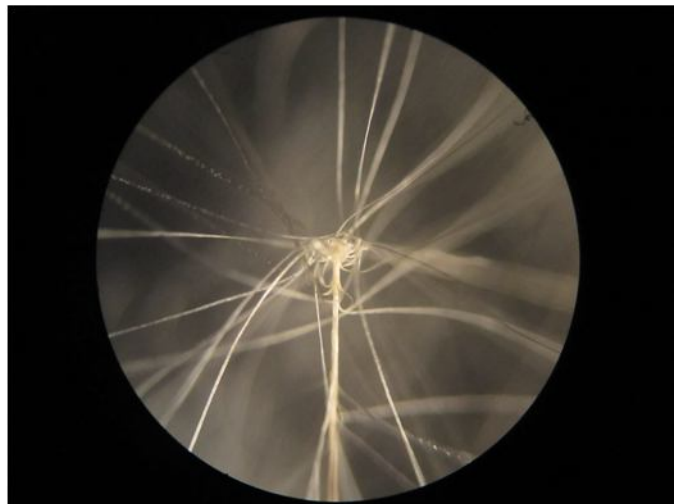
実はこのケサランパサラン、すでに江戸時代から知られていて、当時の文献にも登場している。ほとんど風のない状態でも、空中を浮遊し、わずかな気流—たとえば「人がいる」だけでも、影響されて逃げるといふ。植物種子の綿毛にちがいないだろう。私が、この特徴に一番近いと思うのは、ガマの穂の綿毛である。



「ガマの穂」 右上はバスコ・ダ・ガマだが、無関係。



ガマの穂は、最初は固く閉じているが、一旦穂が開くと、上写真のように、爆発的に体積を増やす。その結果、1本のガマの穂から、おびただしい数の種子と綿毛が出てくる。この綿毛をつまんで、室内で空中に飛ばしてみると、そのままいつまでも浮遊している。人が動くわずかな気流でも感知して逃げ、消えてしまう。一度飛んだら、捕獲はまず困難だ。



ガマの穂の綿毛を顕微鏡で見ると、細胞1個が連なった、極細の綿毛の集合体とわかる。ガマの穂の綿毛の特徴は、「体積が大きい割にもものすごく軽い」ということだ。これに似たものを、人工的に作ることはできないだろうか?これが、教材研究の出発点である。